

戲作  
四書京傳餘師

山東京傳著

大樂  
通用

特  
遠  
1017  
1







序

近世の世に於ては。経典録の如く。云々。と。関よ。  
 匠橋よ。此の如く。上。の。を。ゆ。よ。と。新。英。味。  
 一。育。自。の。杖。園。折。の。提。燈。思。國。不。八。兵。衛。と。  
 も。作。く。一。お。平。此。の。所。を。も。以。て。一。法。入。於。大。門。  
 一。り。を。ま。ら。し。む。の。と。や。藍。丸。ハ。此。の。志。し。の。行。  
 一。を。く。し。は。雖。然。乾。坤。が。く。癡。呆。如。の。使。後。ハ。  
 一。別。深。の。井。を。ど。つ。る。の。ま。ま。か。ら。次。を。能。く。し。て。  
 一。石。橋。固。木。曾。海。迄。近。く。の。振。舞。も。な。る。所。也。

京傳餘師

長三堂藏版





芝蘭の室。鐘の店よりかんごを一つゆいで  
 賣りし。くまの座の色の部物もが鼻をよんする  
 蝶帳のくまの座の色の部物もが鼻をよんする

寛政二年庚戌孟秋

山東市隠 京傳自序

戲作四書京傳予誌

目録

大樂 大樂ハ月雪花ををさたふつとひ色と酒と  
 みたのんぶたることとあらざるをいふ

通用 通用ハ質物の通用物の事ありてひん  
 らんの女郎買をいふ

豊後 豊後ハまぐく江戸げのやのこんどや  
 をいふ

申 申ハまぐくあんの申ありてあひのり  
 ありてあひのりをいふ

京傳余市 目録





異三堂藏板



旗傳館館  
目録

異三堂藏板



京傳子誌弁言

近來著書刊行之盛前古所未曾有也。經史百家有用之書暫措。稗史小說殆似無益者。亦陸續刊出。層上架屋。不知者以為害。而識者有取焉。夫稗史小說之裨益於婦女童蒙。不鮮少矣。是金聖歎所以評訂水滸傳三國志也。歎同業鈴木君。年々魁春。故兌野史多種。每得雅評。是雖由君精選刊書。抑亦非有大方吹噓。易克至此。今茲所刻題京傳子誌者。則係京傳翁擬經典餘師。而所載筆行文諧。道學愚發。余知其決非無用之書也。識者一讀。必信余言不誣。伏望博雅君子。賜購覽重辱高愛。判語何崇。過之當君微一言書之。以辨卷首。併代君謝愛顧。諸君云。

明治十八年三月扶桑橋南西涯畏三堂主人識



大樂

意氣狂句

堅衆曰大樂功者之虛言而  
 兎角入欲門也於隙可見通  
 人爲樂氣質者獨賴金銀之  
 損而貧乏次之客者必由是  
 而迷焉則庶乎氣差矣

それ大樂のうらむをいふは春ハ名川の汐干よ何ぞ



て身代のひらくことあるも思ひもほそ志の測の深ふ  
まあり。てまんててててのふあゑあゑのあど死とあり  
ちどあゝをどろつけどもそそゆ死あり或ハ上野内  
屋山死鳥山の花見は替閑養老を引さくを流  
行皇帝の瘞よりもやたむやう小敷くくる密  
花のりを含ひ武家方の血氣盛あるの喜色こふ  
うど死をド死のよひあらんまゝくどるがん持のい  
らぬたのーととちうけ一日金一分の借馬は鞭赤く  
を騎の流もあつたまぢら心の弱のをづかゆ  
るそて大門口はほあぐ中の町のあ橋の寛保の昔よ

かすねど人おそくからざる実中一の君が名び花  
の葉は鈴鈴の山をさし梅もひんあくうつら  
まてまて花よえんる花のくまゝくどるー目よ  
あそむ 山時ある物壁魚の川をくの声よとめて心  
づきぬら夏があそそま今あいつとて死とま  
くの君流よまぬけのーと客人とらんぬるま君流の  
るまらうを下くーと死つありの二書むんとう  
がむらひもあそくあつべらうをたやうあそくうでん  
あそるまもせあんごあつらあそららん圍う雲よそ  
あそやアがまそんあまそめとらあどとマアーツのむど





よいエーく ちねおきまぜんていごさりのませぬらん  
 のとあさくらのほねをくらけさるい古原一ツ春ニツ  
 のとつらふ酒が人をのんど宿の車ハ子まあれ  
 川つ流してまきしひまきしひ水よそをまてとらのお  
 礎をおろし木乃伸とらぐ蜜人よあつて遊ばも  
 あり夏ち墨水よ遊舟をうこのの江戸流る者のひッ  
 こぬきとつらみだんおひらりお神八人この  
 人数舟をまきつらを流るなと口をさむをがらのら  
 三弦にてうらひささるの大ききささのせん  
 より陸よい舟をええわらる隠者とあまが舟

京傳余市

コト...



若あつらふ花必び蝶おどろくも人不知と流  
 のさへいふも盛者必衰の及程をあらぬま  
 まづどや千住の忠貞をうらむと女も身は袋と  
 云とらふふきがつらぬ俗おどりのあのかうふさ  
 ぐもさか鼻翳の戯も下ややんよんまていあるぞ  
 と憂世を悟り影あるも実の縁あり絶のまげと  
 一とを拵まのせんあめつらこひひちかか一のふ  
 感るも根が己がらの欲るあふまてつらむとらむ  
 とゆぬ申すの迷情ぞか一は隠者も縁があらば生  
 若必滅の場あへきもつらむと陰くらあを評する

も岡焼餅の溜をよづむう一の目もくまぬまや  
 舟よのまこい一がは舟の目もくまぬ舟うら何ぐり  
 て香もまさんと津波の何もあが水室よ下知て隅  
 田堤のちふこそそぎらよせ中田屋うむきやうたじ  
 の舟をのつこのむせくま後の玉屋こつあもらら  
 流とつらもあまも酒色のニッふのこもあつらり  
 文月の廊の燈籠み所を思一の總角も楯が  
 あをるももあう一周夜とあしん糸色を一折毎  
 ふとの一つらぬるてもらん客人の身よりあぐれ  
 出一金玉うとうたがひ唯人の乳をつらあぐるせんま

京傳金目 大巻

四一 三堂 齋林



いどあけあり客の目をやどらるせさらふ内幕の  
 かりつりとあそびまじり縮張の煙籠のそつえあま  
 ど女郎の落懐ある約のうちのまこもるぞ二の  
 うらりれ硝子細工の右君をささるふつーたつうと  
 あもるころまもそのおとりの正徳のむー中万字屋  
 の玉葉が遊苔のこあふとがーまどあーまきと今  
 のそまふひまうらうらうら客人を迷もま煙籠のあうだ  
 ちとんのまをう近來附合のうよまをとりつるあり  
 ちるりのいうとく煙籠のさのくこまをこまあむだ  
 むり十五夜の月えまのまもまもままもままの



京傳館前 大綱  
 五三三堂藏本



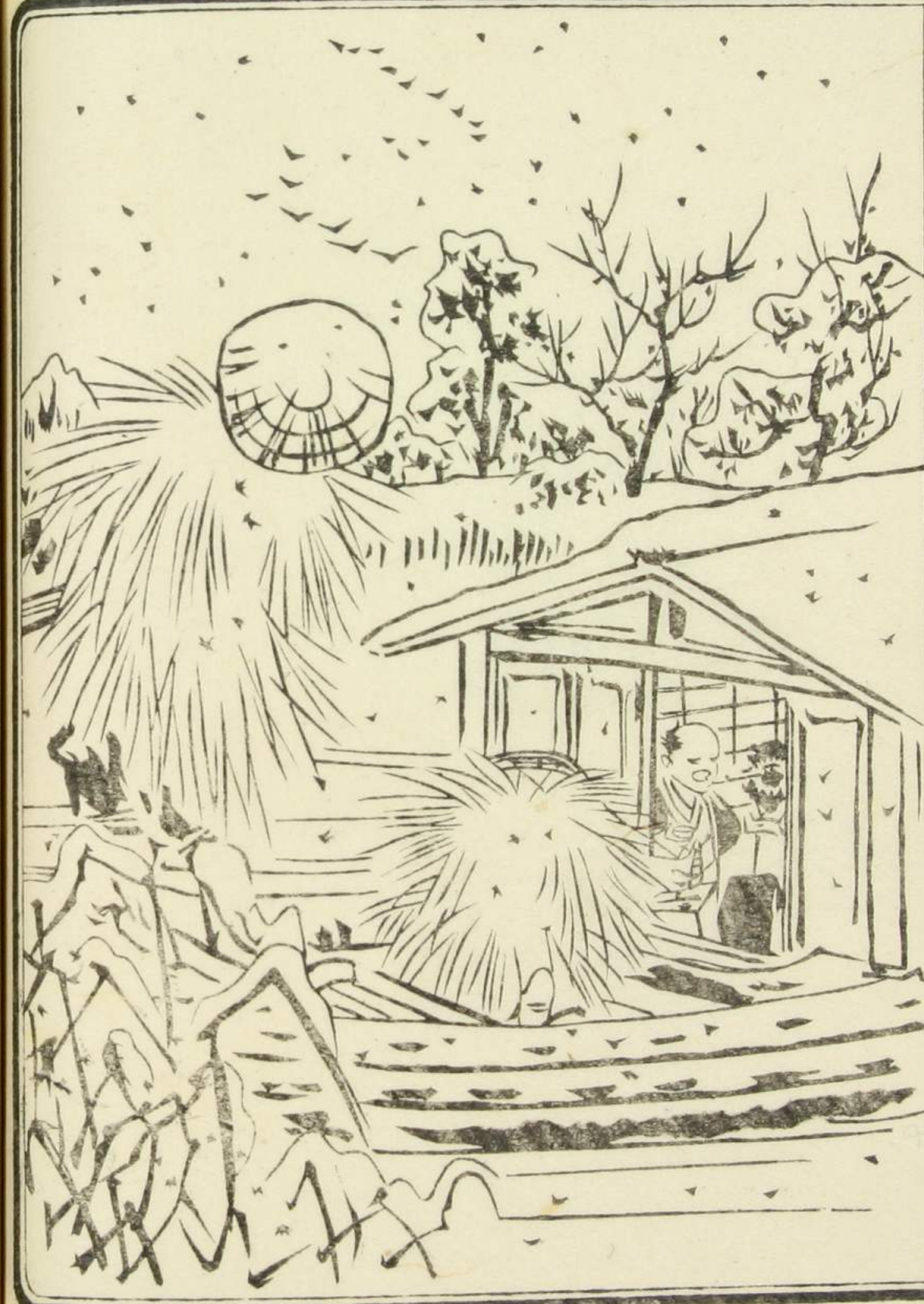
月をめでて詩を作り舟を添へ  
 け夜色里のあはれをひらけ  
 祭礼うけく土橋仲所三橋新古の石場  
 一年の大紋日月えと祭礼とを兼備  
 日小うつて茅も一夜ふらぐ  
 のとの百姓とある店考あまび百日の洗法も尻一ッ  
 又放り陸をひらくお寺極ありこそぞま如の月小  
 何ぞつひまの隠居右の月えと志らきたり旅の  
 月も一風流と南驛の徳侶ふらふらとあね坂村田  
 新叶巴かさあぐ助六の氣位よなり藝のまけの

ろろら安房上総の月えと真一田毎より  
 かんぐく君えまゐる伯母捨ふあまが日業をさし  
 あまでも次広ぬあまらと扱と氣いむせう  
 又高橋のまらうらぬる橋をららと扱ふもあり  
 そ外端のいさかある色道まで月の光りの  
 あつてまわぬの月らなるふらどが  
 今さらのあま思ふ今までありつる息子とり  
 えんちうしてまての鬼怪屋ふらけく  
 錦より二重の紅圍の錦ふらふらと又ころと









変子衛の若女よのりまをえくつれいさぐ地をよ  
 のむの産をよのむがゆきまののせまびと四一  
 たり鬼角推がえんけたの迷ひとまきもたりおま  
 ども富之のころちありま施あるこのと考うて  
 も難し花がうつくしいとく花をよよ居續もあふむ  
 月の明ありとて引窓うらえてお真もかすまごら  
 り香も面白ういばさむぶたのいさ女をよとむ  
 るらわいひあがらつまるこころをありをさく入汰  
 山あまむるなるも奇文と思をまのゆりんも考く  
 えん鶴ふのり銀あまし航軍うら物をもくそと

京傳館前 九巻



詩傳 食言 九樂 木下 田中 三堂 症松

うつく羊とあそ仙術よりもさるうとさる杖とぞ 猪牙の  
ま口のちりやまやうの中をさるまをさるまをさるまの勢  
ひとさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
うとさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
杖とさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
をさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
ふのたのさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
かさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
牌よさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
あさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを

してあさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
又酒をさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
よ一盞のんでさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
りさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
かさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
おさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
るりさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
あやまらさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
さるまの子をさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを  
孝とさるまをさるまをさるまをさるまをさるまをさるまを

神傳 餘師 木下 田中 三堂 症松



むむなかりとやむりやむ日本一の涼の場おとのてちや  
さき考集したる地も今自れ忽一河の流多と  
なむどとま清水あらぬ盛衰の世の中を天のあつら  
しむるところあり。なんよそのどやチアと歎息するも  
そのまぶせひとみのあるら

大樂畢

通用

若衆曰無錢之謂通不迫之  
謂用通者半化之貧乏用者  
紋日之出入其錢乃寬永年  
中通寶大夫恐其久而絶也  
故筆之於文以授格子其子  
宵言無理中亂寢客衆不逢

意氣狂句

京傳會館 大樂

京傳會館 大樂



其夜為千里語之則渡苦界  
省連則恨藏於店下畧

そま通といふんぞ列子いふことあり徳をのり  
人ふらう之を聖人と謂杖をひく人まらうつあまを  
通人と謂とい言こづつけくえまびよく今の通と稱  
ま若あまらり徳まども金銀のろまふゆ川で  
も活いよ持ち居る有り気質いあく難ほ唯通と世  
まとの差別を知るをひく通と滑い通と世まとの  
差別をまらるる世まといせんうまらう小通用の二

字をひくいさかきまらんを風凍せんま万里  
を井といひ井を十あをせく通といふ是をひく考  
まば子方の外の外までもようせうちまらと通とまじ  
又まの首よりきられくのくままでも金くしそまが  
たのりら記るうな記を通といふべし如あよこ妙六通  
あり井と圓通あり象の仙人も通をうらうあて下界  
たまけと知ま旅も通方うせての麴町の市ふまらさる  
吾系通深川通芝居通といふもよくまらまらる  
をいふべし又用の字をいせん天地全功あり象あ  
金司あり又人よは用ありと人用らうけいり女もた



ちまもちの彫造枿とあどぎも用らまはるる時ハ麒麟  
麟も魯人の古傘よ色中ま牡丹紅葉の類とあら  
ん又傾城の言よを泥をゆきき〜紋日物日をた  
のむこまを想く用とらあなり又急用とつぐたはる  
丈よ用のあつたため〜酒屋の用沖用のわり  
車ぬこま等よのつとも洗あ〜又通用とつぐたは  
傍物の通用物の多ありこれふつ〜昨日一ツの青  
澆ありなるふ表澆を奪ま〜といふ者ありま身代ハ飯  
器よ車を志りもるくらあの〜〜なまは何くらら  
らど一燈ハ傾城買よ身をゆ〜〜花ふめで月ふ

うらまゐあもあのび嵐あも海ひあまの鼻ひくう  
ねが者の略希をさ〜とせどえ旦の庭のた紀史よ  
り方三十日の陰表あるひま〜月雪花のこッ満園  
のう〜ふ〜七化を〜〜もそのと〜中る〜しを  
志〜而后の世不隠ま〜〜義梅の別業よ〜ひ  
こ〜孤獨の〜〜も世を〜あ〜〜あ〜  
されハ昔〜〜の并屋流の三味線も〜の根メよ  
けま〜〜の湘も〜あ〜〜世を〜チヨロ  
の帯ふ結びを都も〜安〜〜ハ〜和佐吉やの  
燈管ふんのゆあを通〜小人困居〜〜るを〜

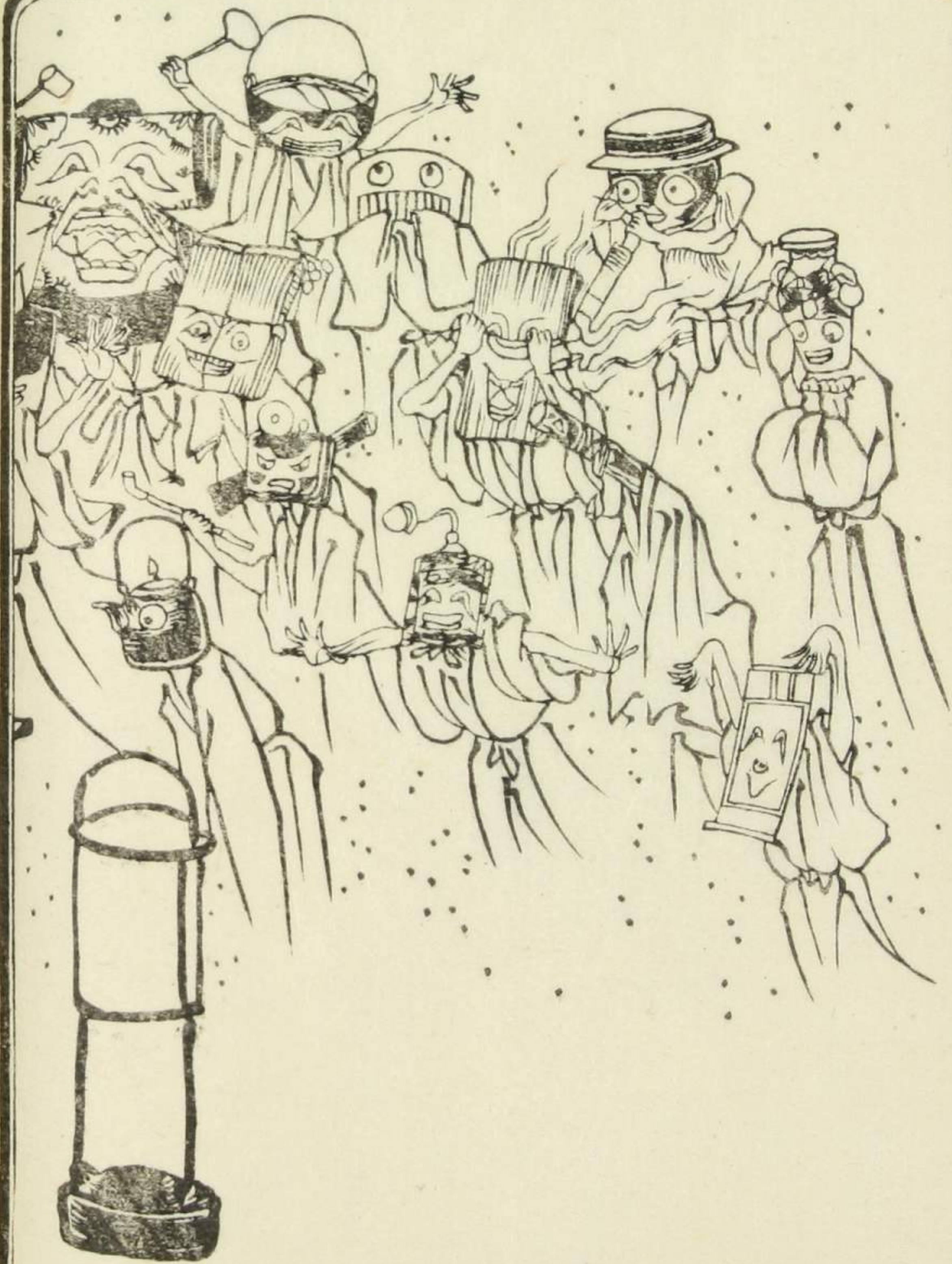
二葉集 終語 贈物 附 三葉集 終語 贈物



のいぢりめを考ふおとよきねねがうんや〜も片肌をのて  
 肺さいふくやふをもちき後ごのいさむやうも外山とやまのうきさふ  
 ひ〜〜だんぐふきう〜さう〜あり熱ぬれあが〜も  
 けつ〜う角かくとま〜〜ゆ〜うお眠ねむるも枕まくらをお〜うまを  
 惟ただぞ時宗ときむねおあらねが祐成すけなりが出男でむこあも何なにのま〜  
 時ときあらねが池いけの水鏡すいけいともあのをま〜さ〜さ〜あう〜う〜  
 と首くびを何なにぐま〜び〜い〜もい〜うお吳い龍りゆう吳い龍りゆうのむけお  
 あらそをま〜お〜う風かぜをお〜〜あ〜う〜だ〜くをそ〜う〜  
 さた〜ん〜う〜あ〜〜湯ゆ氣けの息いきま〜さ〜る〜鼻はなをつらぬ〜  
 鳥とりあ〜る〜一目ひとめえ〜う〜う〜り〜氣きも〜魂たまも〜夫と上かみと〜口くち〜口くち〜さ〜ら〜お人

心こころ地ちいあるま〜け〜う〜が彼かの化物むじゆの〜ち〜取と〜とわが〜たが〜ら〜う〜げ  
 あるま〜う〜〜ま〜け〜う〜い〜う〜お鳥とりま〜か〜あ〜ら〜ま〜お〜を〜ら〜〜と〜あ〜り  
 是こゝろあ〜〜い〜壽とよ永えいのむ〜う〜〜海うみあ〜ら〜う〜び〜う〜る平へい家けの〜門かど  
 とも何なにら〜ぞ〜化か物ぶつを〜空そらの煤すす拂ふき〜も〜あ〜く〜信しん女にょの〜世よ中ちゆう  
 た〜ま〜け〜どのの〜お〜ふ〜お〜ち〜教しやくされ〜〜繩なは目めの〜細こを〜う〜け〜七しちッ屋や  
 の〜ら〜お〜ま〜づ〜め〜ら〜ま〜〜〜う〜か〜〜も〜や〜ら〜ま〜流ながれ〜も〜あ〜ま〜び〜迷まよひ  
 居い〜と〜ま〜や〜八はちヶ月げつも〜お〜ま〜づ〜り〜更さら昔しやくより〜信しんと〜云いお〜ま〜れ〜お〜托たくぞ  
 我われ場ばお人ひと信しんあり〜信しん疑ぎ又また言こと信しんあり〜信しん疑ぎを〜信しん疑ぎを〜信しん疑ぎよ〜と〜く  
 と〜い女にょ房ぼうが〜信しん疑ぎを〜切き〜時ときの〜推おし〜云い〜ま〜あ〜〜〜して〜流ながれ〜の〜舞ま  
 春はると〜同どう日じつの〜海うみあり〜む〜〜〜ま〜る〜何なに来きたの〜上かみ人ひとと〜の〜や〜十じゅうと







せはつよとたつる事ありしが徳と十念のうら二念をも  
 どまらざればよはし上人生涯九念のこまらうりたるよりく  
 九念寺と云寺号何方あり今ふのこりたるよしを  
 せくあるまは佛の方便ともあり又あまを字を徳ふ  
 とまらる連分師もあまは風流のなともなまらる古人  
 納子いごがふを徳ふをきたる時あり新田義貞の  
 こまらつるれちかをお剛孫倉徳村が徳の海平江  
 徳ふあづらう軍の利運を徳神よこまらるるうら  
 徳神こまらと感徳と徳を徳ふ海上よこのと流き  
 とらやこま徳ふあ流うくと云云徳りいはけ付うりのり

ありけると今よまを徳利が徳とのあまは新僧あまぞ  
 う又徳ふとのよ言ふゆての徳の上徳秋の下徳何  
 り或の徳と丁の入くああり天地も又徳屋のなを云は  
 徳まあ人のまは徳物をとらむ火の徳人あ徳嵐  
 徳の徳の徳と徳れまた徳あるま或は徳ふまら  
 とら言あり是十の字の徳をまらまら七の字とある  
 是よりまらうあつひあるま七ッ屋と徳あまも  
 別はゆらんをらまらまらあらんりまある時ハ徳ゆび  
 をまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら  
 凡まふあまらまらまらまらまらまらまらまらまら



鋪とのひ債相と興貨とのひ債れを商賣あぞと云倍  
 後あり固我の持金の身がうりふたちく暮らんを  
 さらん火妻の難儀をさらふりのあるふ今人のまが  
 放埒ふ身をのちくびやともされば我等をら  
 むる事ぞう一或ち女布を身交せん若ふ奴ら申の  
 らき一私をを私債よのまき又女布も若まよら  
 ひくさる保とあり兼約下結禪まで貸入して苦界  
 十年操料屋のぬふるむあり或い初學の代  
 小給をらるめあがひきッ子の尻の穴の産まて  
 疎家のとらうつをそらるあづらあまを金といゆら

一人りの抱を人貸ふ入く坊妻よりちとみ入る孫  
 のらぐひある若をこのて富のれを男まぞ  
 主人のらひある仕合せの布を教まもあ  
 り或まのまきつらあらぬ大小もまげ出あひさ  
 のの佛像までもまげさげお供をきてうけるお  
 きの恩をうけく世を知らざるがぞうありとて我  
 つらつらあしむ利おびをたまんよまがもたらまばけ  
 身ハ氣よくひさうまつひお難の柳原の干店ふさら  
 ままんけ報をたらまんよの貧乏神の末社とあり彼  
 思あおの徒がば園よりけりまく是書とららん



汝ハ其のもあやれもせうちの介なればけしむをかくり  
 きうせ世の中の不埒者どもお供てのらひうけのど  
 さんあてのるに因重信をまぬゆるふらぬきせん  
 修屋地獄の事次方主小志ぞ一のいとをこひこま  
 せむあつとせむせむととヒウドロクのおさむり  
 かまけまごうにあらざして南風ふあつて海月のお  
 とくあまりくとうせあつる鳥有も始乃やどかそら  
 かりしが彼物れ出矣ふ遠てひーる古今よ奇ある  
 るあまが彼等が速懐ありくあわくも病をかかえ  
 しを予よかろりしが彼物れの精がひひーかくのーを

根の急用ありく彼をまゝともうけるらうけなきわ  
 忍をうけくひざに工面をゆるぬきー忍をあらぬふ  
 あらるべーも付の必き彼の怨念とらうつたてにーか  
 身をうらぐさところたがひあーををひらめらり浴衣  
 を襟よ肩ふくあてと緋まのいろを彼ふあても流ま  
 せゆひと流べども八月がたては流るあり利上のまづら  
 とせんよりものつまるあひ傍ありいろは短ちの志の字の一  
 句は彼をまづら上まよてと女房をらうーめーも不宣  
 乎



京儀食自  
通用

一八  
異  
三  
書  
林

通用畢

ツウヨウマシヌ

明治三十七年五月二十七日

千原清造氏寄贈



